

あしたの郊外

〔取手アートプロジェクトの広報紙〕

— 郊外のまち茨城県取手市で、17年続くアートプロジェクト

第二号

TAKE FREE

Toride
IBARAKI

MAY 2012 AUG 2016

URBAN RENAISSANCE AGENCY

Special Thanks to

TOGASHIRA
RESIDENTS

IN MY
GARDEN

全作品完成特集号

15
Works
on
11
Bldgs.
TOGASHIRA HOUSING COMPLEX

取手発の関東鉄道常総線に揺られながら守谷方面へ向かうと、カラフルな扉が一面に広がる団地が見えてきます。2016年8月に構想から4年の歳月をかけて全作品が完成した、戸頭団地を舞台としたアートプロジェクト「IN MY GARDEN」。住民の記憶とアーティストの応答から生まれた11棟15面の作品群は日常の生活風景の中で時間を重ねています。普段の暮らしの窓外に見える、団地の壁に仕掛けられた空想のスイッチ。ここから、異世界への扉は開くでしょうか。

〔表紙写真〕IN MY GARDEN(扉の向こう側)2015年 UR都市機構・TAP共同プロジェクト 制作=上原耕生 撮影=阿野太一

TAP
Since 1999

TORIDE
ART
PROJECT

HANDMADE
ARTWORKS

Artwork by
UEHARA KOUO



日常に同居する作品と郊外の新しい文化

2	団地の壁はわたしの庭 〔対談〕住友文彦×羽原康恵	4	IN MY GARDEN 全作品紹介	6	空想団地リノベーション 〔第2回〕一番せまい部屋	7	取手のひと／しごと “戸頭”特集	8	半農半芸 プログラムレポート2016
---	-----------------------------	---	-----------------------	---	-----------------------------	---	---------------------	---	-----------------------



エピソードは団地に現れた扉型ポストに投函された



作家の活動紹介やプラン制作の場ともなったスタジオ



作家の手で幾度も描き試されたプランの数々

羽原康恵（以下、羽原） IN MY GAR DENというタイトルにも表れているのですが、団地の壁は「公共」のものだけれども誰のものでもない状態になっている、という意識が作家にあって。壁に作品があることで、家の窓から見える風景に自分の庭のような愛着や共有感を持たせたら、という意図がありました。

住友友彦（以下、住友） 公共スペースの在り方が変わっていつているって、これが捉えられていて、メッセージとしてシンプルだから普遍性がありますよね。団地を公共空間としてみなすっていう視点には、団地が昔と今で何が違うかっていうメッセージが強く表れている。経済や社会が変わってきていて、70年代の団地がたたくさんできた頃と今の公共空間は何が違うのか、っていうのがテーマとして織り込まれている。

羽原 壁だけでなく、プロジェクトそのものを共有する仕組みとしては、地元の方から寄せていただいた、ごく個人的なエピソードが作品の着想のもとになっています。戸頭の歴史や文化などではなくて、その人しか知らない日常の感覚や生活風景を。それを作家が頭の中で変換していく。

住友 エピソードを寄せた人っていうのは当然今ここに住んでるんですよね。その方たちも含めて、プロジェクトへの反応はどうなんですか。

羽原 ほぼいい話しか入ってこないです

が、こないだ初めてネガティブな話も聞きました。こんなの付いたら団地が軽々しくなる、っていうおじさんに出会って。

住友 軽々しくなる。もっと重いものなんだ。

羽原 もっと重厚にあってほしかったと。70代後半くらいの男性でした。いい話としては、嘘みたいですけど、引越してくるのにこれが決め手のひとつになったっていうお兄さんがいたり。面白かった反応は、ツイッターで「戸頭団地かわい❤️」って、女子高校生か女子大学生くらいかなっていう層の方が呟いてて。

住友 半立体だから、来てみて見るほうが全然いいですよ。立体じゃない場合、やっぱりイメージに消費されてっちゃうところがあるんだらうなと思うんですけど、団地の構造物との関係を見ても、作品が自立して見えるという感じがしたので。普通だったら壁画だけど、よく半立体にしたよね。

羽原 壁の向こうに異世界があるような風景を作りたいというのがコンセプトにあって、作家も取手アートプロジェクト（以下、TAP）も、半立体にするのにはかなり粘りました。

住友 今回のプロジェクトは、一人の頭の中のビジョンが実現される過程にいるような人が関わっていきつつ、そういうすごくコレクティブなものですよね。その⑨

壁に作品があることで、家の窓から見える風景に自分の庭のような愛着や共有感を持つてたら



羽原康恵（はばら・やすえ）

取手アートプロジェクト実施本部/NPO法人取手アートプロジェクトオフィス 事務局長。1981年高知県生まれ、広島、三重育ち。筑波大学国際総合学類卒業、同大学院人間総合科学研究科芸術学専攻（芸術支援学）修了。院生時代に取手アートプロジェクト（TAP）にインターンとして関わる。財団法人静岡県文化財団にて複合文化施設での企画制作を経て、結婚・出産を機に取手に戻る。TAP塾第2期塾長。

完成記念特別対談

わたしの庭

羽原康恵

TAP実施本部事務局長

えること、これからの公共のかたちとは。トをめぐる対談をお届けします。

協力＝飯田尚希・松本直子（hako café 取手市戸頭3-2-1）

ロセスで、作家本人がどういう体験をしたのかに興味がありますね。それは単に壁に描く線の完成度の話だけじゃなくて、他人としかできないような部分っていうのを、どういう受け止め方をしたのでしょうか。

羽原 そもそも協働型の制作はほとんど経験がなかった作家なので、彼曰く作品をつくるにあたって、一体どれくらい外部からの影響を受け付けていいのか、受け付けなくていいのか、すごく葛藤があったと。

住友 でもそのことで、自分が考えていた以上のものが生まれたりすることもあるじゃないですか。それが右行ったり左行ったり一直線じゃなかったところ、っていうのがこういう公共の場を使うときの面白いところであり、反面ストレスになるかもしれないし。

羽原 終わったすぐあとには自分の中でこの作品をどう位置づけていいのかセンチティブになっていったそうです。まだ何かできたのではという感覚があった。でも時間が経つにつれてそれが変わった、と。今回プロジェクトの形をとったのは、TAPが意図していたところも大きくて。

プロジェクトがスタートするときに、住民の関わりしろとしてエピソードをもらうのはどうか、というアイデアが出て、面白いですね、と。でも実際に住民の方から言葉が届いたときに、どこまでその言葉を自分の作品の中で受け止めなくてはいけないのかっていうことに経験値がなくて、苦労した、と。

住友 出発点がそれなんでもんね。方法はTAPから提案した。それはわかりますよ。きっかけづくりみたいなものが、住民側からなのか、作家からの投げかけなのか、実は重要じゃないですか。その関係において、結果的にキヤッチボールがどれだけできるのかは、プロジェクトに与えられた時間によってすごく左右されるし。

羽原 今回の場合は、キヤッチボールの回数で言えば結構あったんです。でもボールが飛んで来るたびに、彼がまともにそれを真つ向から受け止めていて、それが次に出てくるプランにそのままドンツと反映されて出てきちゃう。それを何回か経験して。途中で、それをそんなに、自分の表現を曲げるまで受け止めなくていいと。⑩

住友 活動がはじまるきっかけの部分に地域の人たちが関わるのは大事だと思うんですけど、ある程度どこかでアーティストが、あるいはプロジェクトの担い手が引き受けてしまうべきところはあるよね。

羽原 プロジェクトを仕掛ける方の引き受け方という点では、今回のように作品を公共空間に作った場合の、ハード部分のメンテナンスっていうのはもちろんなんですけど、ソフトの部分、つまり住民の側と作品との関係が続いていく仕組みを考えていて。それはつくれるのかと。エピソードから着想するっていうプランは、生活空間に作品があるがために、暮らしの中に作品を受け入れざるをえない人たちにどう気持ちを受け付けてもらうのかという試みとしての意味もあつたんです。住友さんが館長を務められている「アーツ前橋」では、開館時のコミッションワークを地域の方と一緒につくられたと思うんですけど、そのようなことって考えていらつしやいますか。

住友 言っていることはすごくよく分かる。地域の人はずっと愛してくれるものになるっていうのは理想だし、いいなって思うんですけど。でもそこまで引き受けると、その人たちが思ってもいないような方向に持っていくのがなかなか難しくなつたりしないかな、というのもあるし。むしろ住民の人の気持ちを100%僕らがわかるのかなあ、って思う。発言や発信はしないけどずっと作品を見ている人がいるっていうことを想像することの方が意味があるのかなとは思っています。そういう人たちは自治会にも関わっていないし、例えば汚くなってきたからきれいにしてほしいっていうのも言わない。でもそつちの存在を意識する方が、アートとしては長い目で見て意味がある仕事かなっていう気がするんですけどね。

アーティスト型からプロジェクト型になって生まれた「活動」は残してきているんですけど、目に見えるハードとして残るものはほとんどやってきてなくなつて。だからなおさら、今回のプロジェクトを受け止める方たちとの関係は、TAPにとつては挑戦だとは思いますが。モノが残るかたちでのアートプロジェクトにどう手を入れ続けていくのかっていう点で。

住友 人の気持ちを紐付けていくっていう仕事は、結構大変だし、そこまで本当に引き受けられるものかなあっていう感じがしますよね。

もうひとつ、人の気持ちをどういう風に結びつけるかっていう問題について、団地だから顕著に現れるだろうなっていうのは、やっぱり自治会みたいのにヒエラルキーを持った仕組みがもともと組み込まれているところですよ。声出てる人とそうじゃない人との差がすごく出てくる。日本の社会にも近いものだと思うんですけど。そういうところで、いつも直接話してる自治会長さんとは違う、全然関係ない人たちと話すルートをつくるのは、逆に難しかったりするのかもしれないし。

今回の作品ではそういうことに直面しなくてもよかったのかもしれないけど、彼がもともと沖繩でやっているようなすごく政治的なものを顕在化させるような表現をやるとしたら、「違う意見を聞く」と言う仕組みとして、もともと団地が持っているガバナンスの仕組みはどう機能するのかなって。

羽原 物言わぬ他者ですね、見えない存在とどう出会うかっていう。

住友 残るものをやると、そのつくったときの初動とは違うものになっていくから。エピソードを送った、っていう人は絶対大事にしてくれる。でもこれが本当に20年後になったときには、必ずしも

「対談」団地の壁はわたしの庭

IN MY GARDEN

団地の壁は

住友文彦

アーツ前橋館長

地域とアートの日常的な関係づくりから見 公共空間でのアートプロジェクト

収録日=2016年11月10日 収録場所=戸頭団地・hako café



これくらいの共同体だから可能なアートプロジェクトの
仕組みがもし考えられたら、面白いんじゃないですかね



作品を舞台美術に見立てての即興ダンスパレードも



プロジェクト完了に向けて7街区壁面を制作する作家



2016年9月のお披露目会では全15作品を歩いた

それだけではないものとして壁面が見えてくるわけだから。

羽原 電柱をモチーフにした作品は、作品が時々人の道標や待ち合わせの目印になって、役割を変えていくイメージを伴っています。作家は、元のエピソードも、自分がこうだと思つて描いた意図も、その先見る人がまた違う風に感じてくれるように期待をしている、委ねていると言つていて。そういう風に作品が独り歩きして、その役割が自然と移り変わっていくといいなというのは、作家も、TAPの側も考えてはいますね。

住友 郊外っていうテーマは、前橋でも共通していて関心があるんですけど、さつ

き言ったことのコインの裏表みたいな話で、郊外は東京より人口密度は薄いから人間関係が見えやすい。だからこそ、個人個人の感性的な反応を制作側がやりがいで得たいって考えたときに、さつきヒエラルキーの仕組みっていつちやつたそれとは違う、作品を支えるための仕組みっていうようなものを、取手とか、あるいは団地、くらのスケールの場所をつくっていくっていうのは、都心じゃできない可能性があるのかなって。

大変じゃないかなあと思つたけれど、これくらいの共同体だから可能なアートプロジェクトの仕組みがもし考えられたら、面白いんじゃないですかね。⑦

住友文彦 (すみとも・ふみひこ)

キュレーター・アーツ前橋館長。1971年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。金沢21世紀美術館建設事務局、ICC/NTTインターコミュニケーションセンター、東京都現代美術館などを経て現職。NPO法人アーツイニシアティブトウキョウ[AIT/エイト]共同設立人。東京芸術大学国際芸術環境創造研究科アートプロデュース専攻准教授。共同企画展に「別府現代芸術フェスティバル2012 混浴温泉世界」、「あいちトリエンナーレ2013」ほか。



C



01

前に訪れたNY郊外の集合住宅では、共用の庭にピカソの彫刻があって、「うちにピカソあるから遊びにおいでよ」なんて言って、友人招いてるのかなあと。個人で所有するのではなく、誰でも気軽に見られるアートがあっていい。



B

Cafe terrace



E

ここだけのはなし



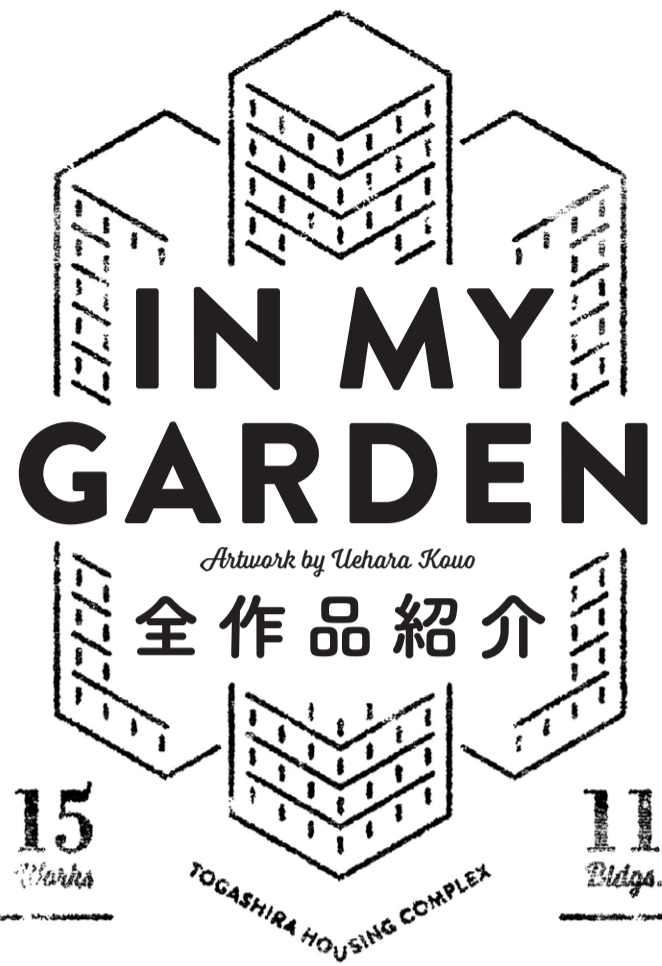
D

非日常口



02

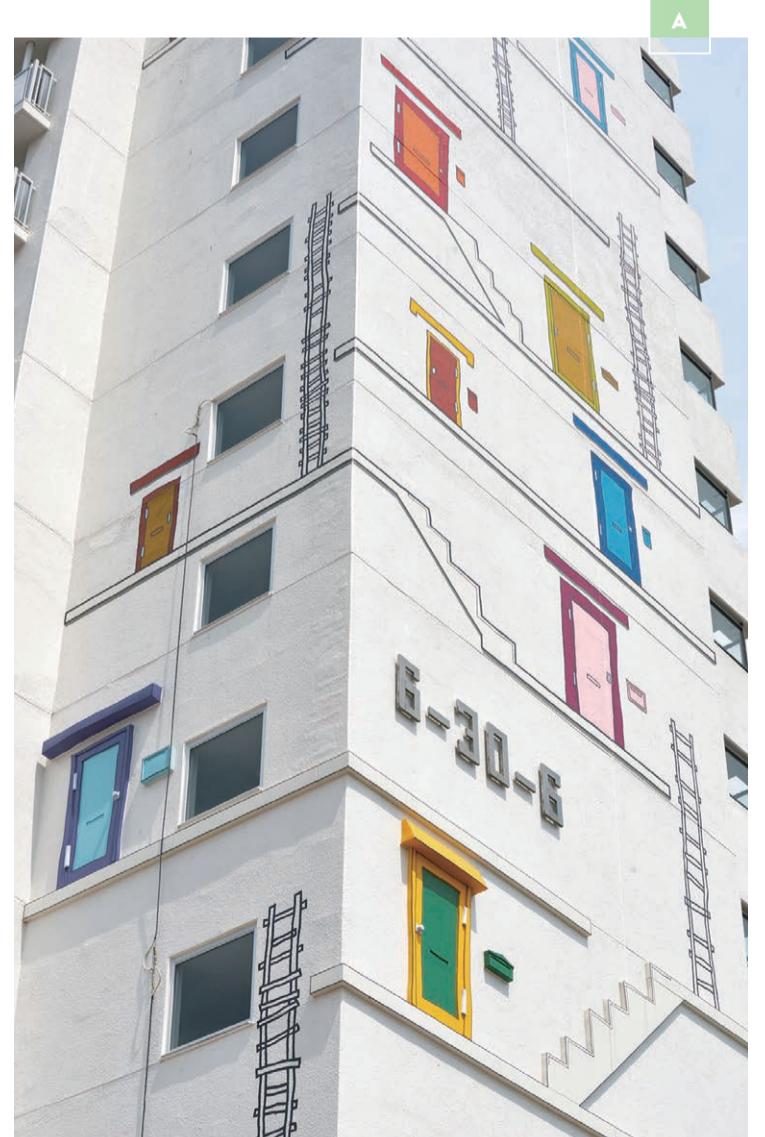
ノミと箱の原理っていうのがあって。小さな箱の中で跳んでたらノミは知らないうちに箱の高さまでしか跳べなくなるっていう。美術も同じで、素材とか場所とか、制約があると、それができることしか考えないんじゃないかなって。



URBAN RENAISSANCE AGENCY + TORIDE ART PROJECT

IN MY GARDEN 全作品介绍

IN MY GARDENは、住民の方々から寄せられた約90通の「戸頭団地の思い出やエピソード」をもとに、アーティストの上原耕生が構想や空想を広げ、団地の壁面をキャンバスに見立てて描いた作品群です。今号では、全作品完成記念として戸頭団地に広がる11棟15面全ての作品をご紹介します。



A

Every morning



F

At home

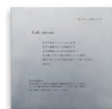


03

作品ってできた瞬間がピークで、時間が経つとだんだん風景になり薄れていく。それをどうやって維持していくのか、もしくはそれをソフトのアイデアでもっと意味あるものに育てていくのかっていう。

Edit 羽原康恵 Photo 阿野太一(A~L)、上原耕生(N)、佐々木剛(M・O)

Find Me!



各壁面の近くに設置されたキャプションでは、作品の基本情報とともにそれぞれの作品の着想の種となった地域の方からのエピソード(6-30街区・4街区の12作品)や、作家自身が本プロジェクトを通じて戸頭団地で経た時間や体験に対する応答としてのメッセージ(7街区の3作品)をご紹介します。

文化を作っていくのは、やっぱりそこに暮らす地域の人だったり、ケアする人がいて育つ作品だったりするんだと思うんですよ。



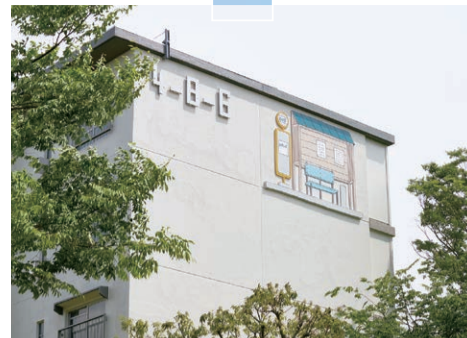
IN MY GARDEN 全作品紹介



Every time



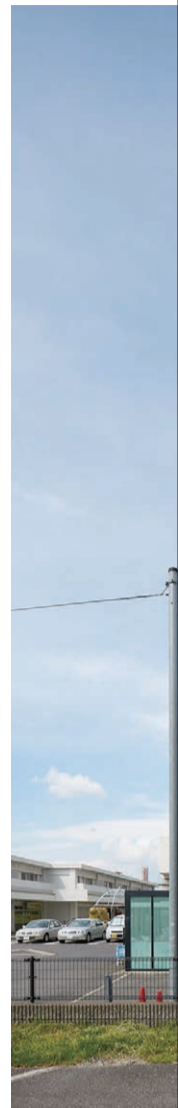
扉の向こう側



Sometime



Life style



Book climbing



出身地の沖縄では、平和の礎に20万人の戦没者の名前が刻まれている。データに残ってればいい話なんだけど、なんで物質化するかというと、実感できるから。実感が伴わないと伝わっていかないと、人に。

05



凹凸がある形だから、時間によって陽の光が変わって陰が落ちたり、鳥が止まったり。そういうのが本当に些細な事だけど大事だった。

06



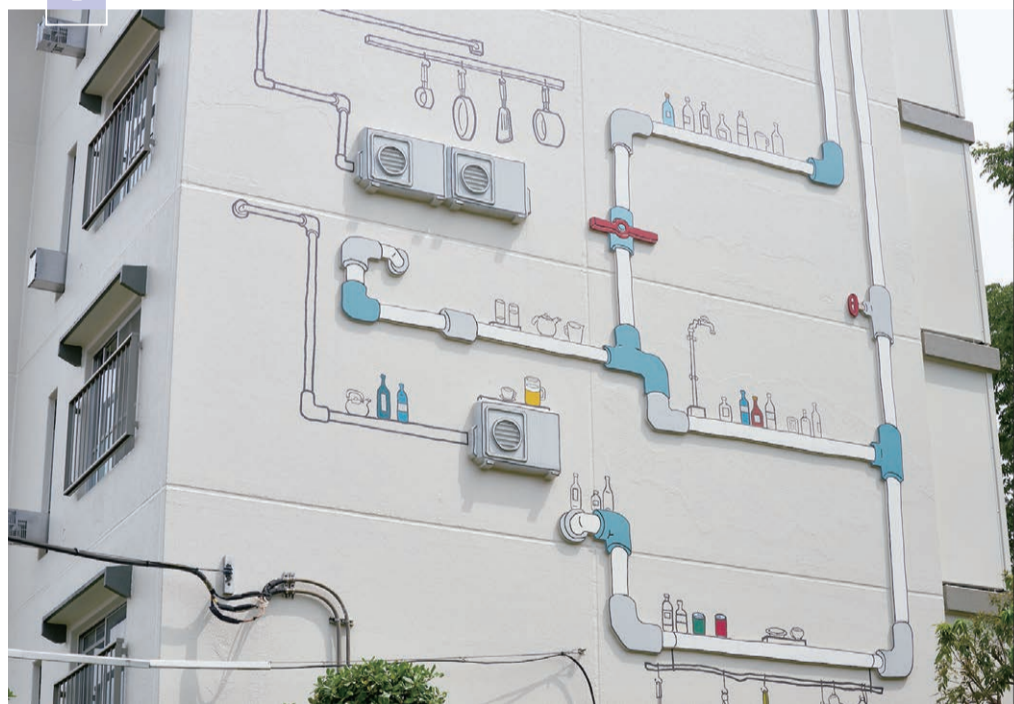
Workman



Update



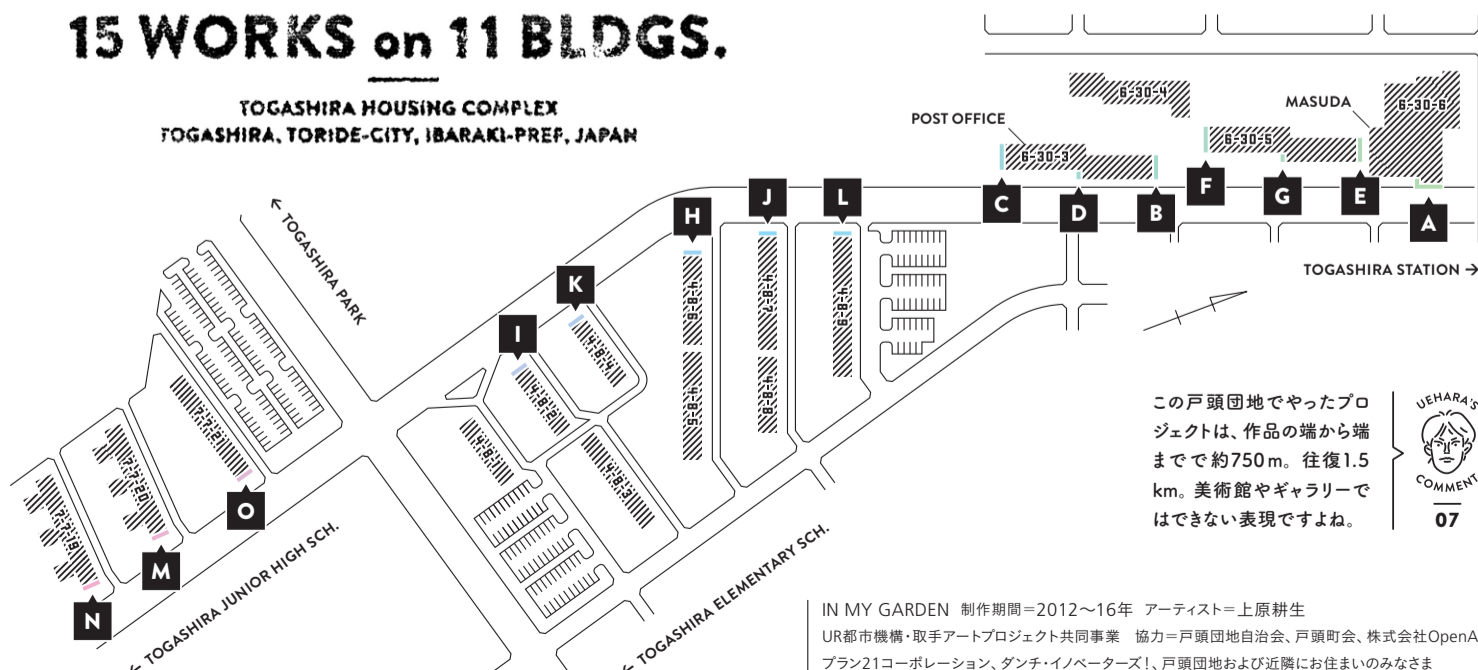
路のしおり



美しい住まいーUR都市機構

15 WORKS on 11 BLDGS.

TOGASHIRA HOUSING COMPLEX
TOGASHIRA, TORIDE-CITY, IBARAKI-PREF, JAPAN



この戸頭団地でやったプロジェクトは、作品の端から端までで約750m。往復1.5km。美術館やギャラリーではできない表現ですね。



07

IN MY GARDEN 制作期間=2012~16年 アーティスト=上原耕生
UR都市機構・取手アートプロジェクト共同事業 協力=戸頭団地自治会、戸頭町会、株式会社OpenA、プラン21コーポレーション、ダンチ・インベーターズ1、戸頭団地および近隣にお住まいのみなさま



Memory

空想地

Ku-So Danchi Renovation

リノベーション

第2回 ● UR戸頭団地 「一番せまい部屋」 (想定に住人…こだわり愛でる一人暮らし)

郊外に埋もれる新たな暮らし方を見つける旅としてスタートした「空想地リノベーション」。建築家とアーティストが、リノベーションマインドで取手ぐらしを勝手に妄想しながらお部屋を探访します。どうやら今回は、住居の「ずれ」から生まれる個性的な暮らしが見えてきたようです。

空想リノベの匠①



マーさん

新堀 学さん
建築家
新堀アトリエ
一級建築士事務所代表

空想リノベの匠②



ゆうくん

佐藤 悠さん
アーティスト
東京芸術大学大学院
博士後期課程在籍

●UR戸頭団地

利根川を挟んで茨城県の入口となる取手市。戸頭団地は、常総線「戸頭」駅前に位置し、同駅から2駅の守谷駅からはつくばエクスプレスを利用できるので都心へのアクセスも良好です。団地内は歩車分離で安全な空間が形成されており、いちょうとメタセコイアが美しい遊歩道は住民の憩いの場となっています。また、スーパーやクリニック、教育施設も身近に整っており、日々の生活に大変便利な環境です。

アクセス	関東鉄道常総線「戸頭」駅より徒歩3～12分
完成年月	1975年4月～1992年8月
総戸数	1,187戸
家賃	42,900円～74,100円(別途共益費3,600円)
駐車場	4,968円

●物件のお問い合わせ

UR賃貸ショップ取手駅前
住所：茨城県取手市取手3-4-8 海方ビル4階
TEL:0297-77-5600 営業時間:10:00-18:00 定休日:水曜

ゆうくん(以下ゆ) 玄関を入って左を向くと洗面所。玄関と洗面所はほとんどひとつのスペースですね。ちよつと家族で住むには狭いのかな。

マーさん(以下マ) 昔は和室にちよつと出出して、夜になったら布団敷いて暮らしていたんでしょね。とにかく廊下空間を最小にするというミニマルな考え方(笑)を突き詰めて設計されていますね。

ゆ 家族の電話の内容とか筒抜け。中学生になったら布団にくるまって話さない。

マ この最小の玄関空間で最初に目に入ったのは、キッチンと和室の間にある独立柱。これは活かしたい。これが丸柱だったらカッコいい。一般に団地の部屋だと、壁で空間を作る設計になっているので、こういう象徴的に独立した柱は出てこないことが多いから。

ゆ この柱の象徴性をどう見せるかいいですね！

マ 近代建築の巨匠でミース・ファン・デル・ローエという人がいるんですが、その人が1929年のバルセロナ万博のパビリオンという歴史に残る名作を設計したんです。鉄のレールを十字に組み合わせた柱をク

ルームメッキにして並べて。鏡面の仕上げがカッコいいんですよ。この柱もクロームメッキのカーブをかけるかどうかどう？

ゆ 団地の部屋にバルセロナの風が吹きますね。家賃4万円代で(柱だけ)バルセロナパビリオン。

マ あるいはアーティストによるカスタマイズ柱を注文できるとか。

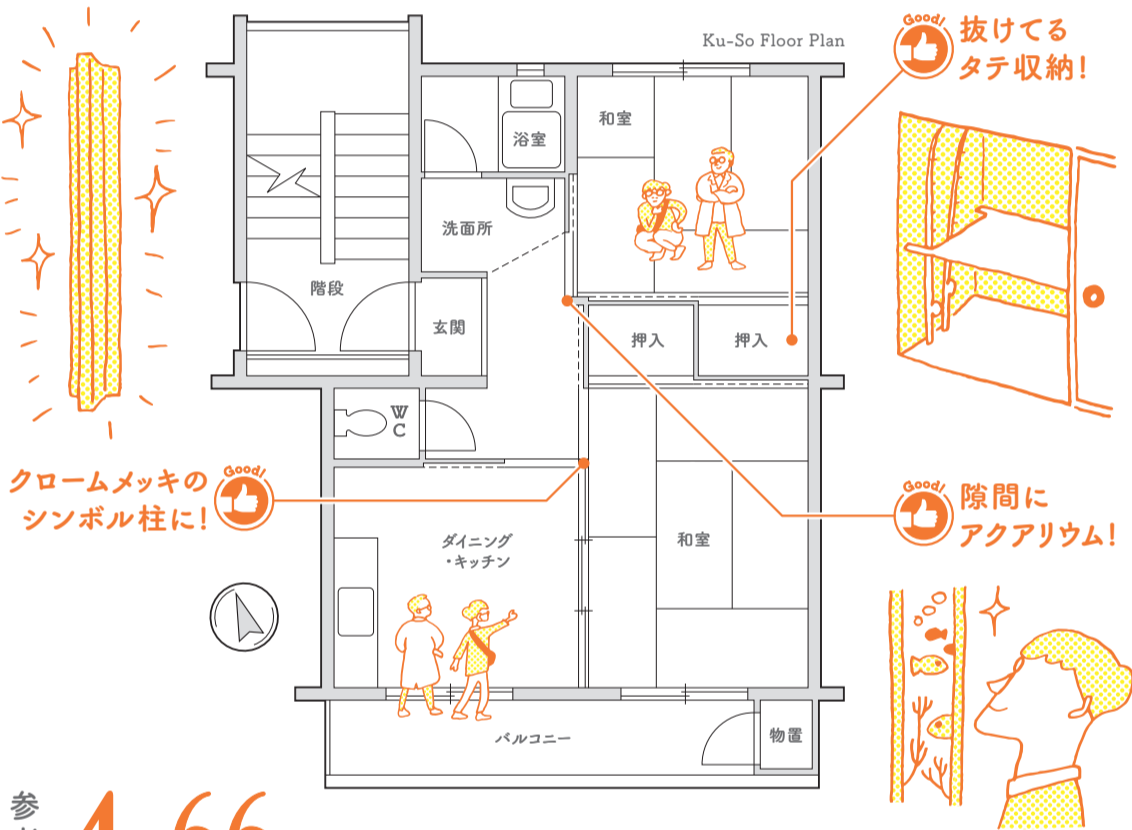
ゆ 住みやすさだけじゃなくて、「中心」がある住まい。

マ 設計する側も、個々の部屋の展開図を描いていると、それぞれの部屋を仕上げていくことに意識がいっちょやう。部屋と部屋の間が見えにくかったりするんです。でもそこに取り残されたこの柱こそが本来はこの家の顔になると思うんだよね。

ゆ 家の特徴と暮らしやすさとの折衷案が出てくるわけですね。正直、ぱつと見て邪魔に感じちゃいますけど……。

マ それを言っちゃあね。(笑)でも合理的でミニマルなこの家の不合理な隙間として出てきた柱の違和感を受け止めて、活かしていくっていうのは面白い暮らし方だと思っただけ。

ゆ こっちの和室でも、5センチほどよくわからない出っ張りがある。



参考価格 **4.66**万円

UR戸頭団地 / タイプ2A(反転タイプ) / 2DK43m²

マ あれ、本当だ。出た部分細長い曇りガラスがはまっている。

ゆ ガラスだし、水槽にしちゃいましょう。

マ 水槽を通した明るさで中の人の気配がそこはかとなく伝わる。直接は見えないんだけどね。

ゆ 押し入れを見てください。左端の部分が上下にぶち抜かれていて、長いものが収納できるようになっています。

マ スキーにはちよつと高さが足りないか。サーフボードもむずかしい。釣り竿が入られるぐらいですが……。

ゆ 謎だ。この団地で一番小さい家に「なんでこんなに謎が。(笑)ではそろそろ一首。」

マ なんだかずれや歪みがたくさん見つかる部屋でしたね。それが住みたい手なりの暮らし方の個性を出すとつかかりになるようにも思いました。

ミニマルな
2DKも
バルセロナ
クロームメッキの
柱光らせ

「近居」という
これからの暮らし方を
UR賃貸住宅が
サポートします。

いつでも顔が見えるちょうどいい距離感で
ご両親・お子さんと暮らしませんか。
ひとつの食卓を囲んだり、子どもと一緒に育てたり。

2016年12月より **戸頭団地** が「近居割WIDE」対象に!

URどうしの近居ならOK! URとUR以外の近居でもOK!

近居割 **近居割 WIDE**

家賃が5年間最大20%OFF!
さらに、同日契約の場合は、両世帯ともに割引!

礼金ナシ 仲介手数料ナシ 更新料ナシ 保証人ナシ UR都市機構



←IN MY GARDENを舞台美術に見立て、野鳥になって踊るパレードに参加する篠田さん夫妻。

あの人の人に
インタビュー!

取手のひと

【戸頭団地の「アート」見守り役】
篠田信五・三三子（しのだしんご・みいこ）さん

No.2



また
楽しいこと
やりましょう
よ、ねえ。

もともと守谷の電気会社に勤めて、科学衛星にのせる機械の機構設計をずっと。エンジニアです。早期でやめた後も、研究のための衛星の機構をつくる会社をやりました。空が上がったらメンテナンスは取らないから、あとは先生方がデータを取っていただけで、お仕事終わり。大したことないですよ、実際は。

オレンジのユニフォームは、終末処理場（※1）でのアートプロジェクトのときです。10年も前ですよ。稼働した頃を知ったもんだから、あんまりいい印象がなくて。「えっ、あそこで何かするの！」って。

でもね、すごく刺激的でした、あれはね。毎日行っちゃあ、草刈りしてみたり何してみたり。お客さんが来たら案内係。その場につくったアーティストがいるんだけど、本人説明しないから。自分なりに話をしてね。一緒に楽しみましたよ。協力というよりはね、みんなが自分たちなりに遊んじゃった。だから雨なんか降って寒い日の車の誘導でも、苦ではなかったもんね。作品、残ってたら楽しかったと

思うけど、永久に残るようなものじゃないからいいんであって。なくなるってことがいいんだらうねって。

壁画のプロジェクト（※2）では壁塗りやスタジオの中のものづくりもやりました。やっぱりそれぞれ得意なことがあるわけじゃないですか。木を切るのが好きな人もいるし、ペンキ塗るのが好きな人もいます。お手伝いの隊を組んで、当番つくって。あの人がいたらこういふのが得意だ、とかあるんでね。つくるところから色々お話いただければ、いろいろな人がいるから。

アーティストもエンジニアものめり込むと周り見えなくなっちゃうからね。エンジニアはものができなくっちゃどうしようもないけど、アーティストはできなくともいいの。エンジニアは最終形が決まってる、アーティストはこういうものがつくりたい、って。できるプロセスが違うだけだと思うんだけど。できたものを楽しむのも一つですけど、つくるところから関わっていくことができたなら、より楽しいですよ。また楽しいことやりましょうよ、ねえ。



※1「終末処理場」……TAP2006のメイン会場・旧戸頭終末処理場 ※2「壁画のプロジェクト」……IN MY GARDEN

取手のひと／取手のしごと「戸頭」特集

Edit 中嶋希実、羽原康恵 Photo 伊藤友二、齋藤剛、中嶋希実、羽原康恵

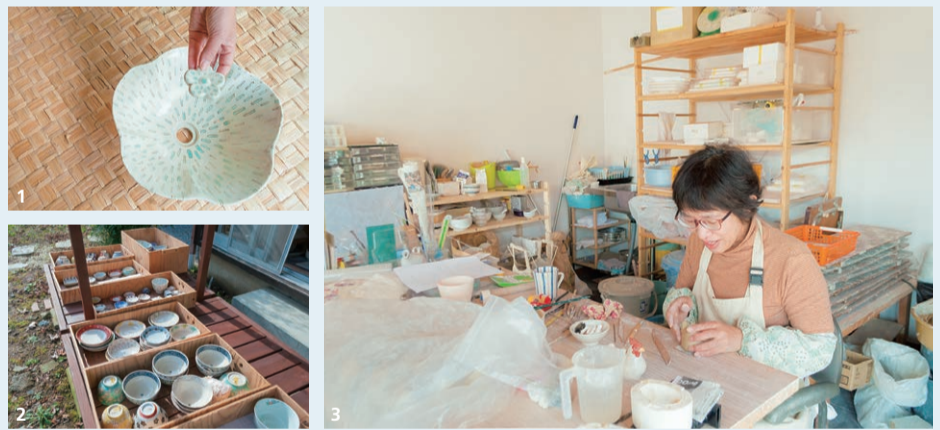
TORIDE CITY #2 SINCE 2014

取手のしごと

WORK IN TORIDE

あじ屋 鈴木晶子さん

AKIKO SUZUKI INTERVIEW



1.陶製の水栓と洗面器の作品も 2.九谷焼の特長でもある鮮やかな色絵のうつわが並ぶ 3.工房で干支のふた物を作中



SHOP DATA



あじ屋
 ◎毎月第1日曜日 9:00頃～日暮れまで
 ※詳しくはブログをご確認ください
 ◎茨城県取手市戸頭3丁目13-23
 ◎http://blog.goo.ne.jp/pizzi-pizzi



工房は通りから見えるガラス張り、庭には窯小屋。通りかかって、なんだろうと気になる人もいます。



のんびりと
おしゃべり

通 りにはパンのいい匂い。今日も戸頭にあるパン屋さん「クローンヌ」はたくさんの人で賑わっている。その斜向かいのウッドデッキがついた青い瓦屋根の家には、最近「あじ屋」という看板がかげられた。

「生まれは福井で、大学と仕事が金沢。青年海外協力隊でモロッコに行ったあと、九谷焼の産地の能美市に10年ちよつと暮らしました。ずっと西側、西日が海に沈むのを眺めてたんです。たいして変わらないはずだけど、日が落ちるのが早く感じますよ。」

鈴木さんは、2年前からここで陶芸家として活動している。

「以前は周りにつくる人がたくさんいる環境で、絵付け師をしてきたんです。でもこつちに来たら、自分でろくろもするしかないの。ラーメン鉢も、こないだは自分でひきました。少しは腕があがったかな。周りからの刺激がなくなったら、私やらなくなるんじゃないかって思ったりもしてたんです。取手ではいろいろな作家さんが点在していて、孤軍奮闘しているんですよ。私もがんばろうって。おかげさまで、マイペースに続けてられています。」

工房は通りから見えるガラス張り、庭には窯小屋。通りかかって、なんだろうと気になる人もいます。

「このあいだ草むしりしたら、3回くらい素通りした後に声をかけてくださった方がいました。陶芸クラブに入っているそうで、それからよくクラブの新人さんと一緒に。」

最近、第一日曜日にウッドデッキにお茶碗を並べて、小さなお店を開いているそう。反響はどうですか。

「前に、散歩中のおばあちゃんが焼き損じの抹茶碗を気に入ってくれて。今は財布持っていないから、ポケットから取り出した小銭を出してきて。熱意に押されてしまって、それで買ってもらいましたよ（笑）」

「すこしずつ人とのつながりが広がってきていますね。たくさん人に見るわけでもないから、好きな人に見てもらえればいいかなって。モットーは細く長く。」

鈴木さんはとても楽しそうに話をしてくれるから、あつという間に時間がすぎる。晴れた日の日曜日、ぜひ遊びに行ってみてください。

HAN-NŌ HAN-GEI Artist in Residence Program



㊦ スタジオで作品制作するマチルダ(左)と清田(右)



㊧ 早川・成田は滞在中、綿花の種蒔きや日々の草刈りなどを体験



㊨ TAKASU HOUSEの1階で稽古をする「nemo」



㊩ フレスコ技法と左官技術で制作された壁画(作=佐藤香)



㊪ 成田・早川の%プログラム成果展「拡張する光景」1階展示風景(作=成田優之)



㊫ 床の間にははんだ付け技法を用いた作品に(作=早川文彩)

TA K A S U H O U S E では、表現者の活動支援をおこなうアーティスト・イン・レジデンス・プログラムに取り組んでいる。30代を中心に実力派のアーティストたちを招く「% (パーミル)」と、芸術大学などを卒業もしくは修了してすぐの若手作家を主な対象とする「% (パーセント)」がある。

「%」プログラムでは、8月中旬から半農半芸のパートナーアーティストである舞踏家・松原東洋と美術家・青山健一が参加するユニット「nemo」が旗揚げ公演(※)にむけ滞在制作をおこなった。普段ギャラリーとして使用することの多い一階には音響機材が並び、展示壁は映像が投影されたリハール用ステージとなり、舞踏・映像・音楽と表現ジャンルの異なるメンバーが日々セッションを重ねていた。上演会場のある渋谷とは異なる、静かで誘惑のない環境での稽古は「集中しやすい」ということで、当初予定していた日数を延長しての滞在となった。

稽古中は二階の事務所にも音楽が響き、事務作業の傍ら、進む作品制作の様子を耳からも体感できた。

一方、若手対象の「%」プログラムでは、4名の作家を受け入れた。春から夏にか

11月には愛知県立芸術大学から、現役学生である清田千萌と同大に交換留学中のマチルダ・マンシー・ジョーンズが高須を訪れ、スタジオを構えた。スタッフとの交流や首都圏のアートシーン体験を交えつつ、2週間のショートステイを終えた。素材を並べてみたり、ドロイングをしたり、と試行錯誤している姿は滞在制作だからこそ見られる景色だ。TA K A S U H O U S E をひととき経た作家たちが、この先どのような道を歩んでいくのか、楽しみである。

実はTA K A S U H O U S E には、これまで本プログラムに参加した作家の作品が設置されている。壁画やシンボルマーク、インフォメーション看板などが古ぼけたビルを彩る。今年度はさらに和室の床の間に早川文彩の絵画と、トイレ空間に成田優之の壁画が加わった。TA K A S U H O U S E 訪問の際には、探し鑑賞いただけたらと思う。

※「旗揚げ公演」……「ピーーーム」2016年9月24日(土)・25日(日) 東京・渋谷space EDGEにて上演

周囲を農地に囲まれた取手市の高須地域は、さまざまな表現者による熱気で満ちていました。

会場=TA K A S U H O U S E プロジェクトディレクター=岩間賢



㊬ モザイクによるシンボルマーク (作=鈴木敬夫)

取手アートプロジェクトペーパー『あしたの郊外』第二号 2017年1月15日発行

主催・発行=特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス、取手アートプロジェクト実行委員会 協賛=UR都市機構

協力=戸頭団地自治会、戸頭町会、取手井野団地自治会、高須地区区長会、UR都市機構、株式会社OpenA、関東鉄道株式会社

執筆・取材・編集=羽原康恵、五十殿彩子、新堀学、佐藤悠、中嶋希美、高木諒一 監修=熊倉純子 デザイン=森垣賢

お問い合わせ=取手アートプロジェクト実施本部 〒300-1522 茨城県取手市高須2156 TAKASU HOUSE

TEL・FAX:0297-84-1874(電話は火・金13:00-17:00) WEB:http://www.toride-ap.gr.jp @toride_ap toride.ap

年間購読のご案内

年間購読料:年2回発行500円/年(送料・手数料)。本紙を無償で設置いただける施設・店舗も募集しています。

本紙記者募集中!

プロジェクトに市民記者(無償・取材時交通費支給)として参加しませんか。興味のある方ならどなたでも。

購読申込・記者申込は、✉ tap-info@toride-ap.gr.jp まで

取手アート不動産 torideartestate.jp

物件、人、アイデアまで暮らしの「おもしろい」が続々登場!



あしたの郊外 WEB ashitanokougai.com

「あしたの郊外」を探る対談・コラム、WEBにて全編公開中!

